

中国の愛情詩

—玉台新詠を主として—

一 はじめに

ここに言う愛情詩とは、中国において上代から伝わっている男女間の心の交流を歌った詩である。この愛情の詩について、主として玉台新詠⁽¹⁾にもとづいて考察を試みたい。

さて漢民族が北方に定住した関係上、その気候の北方の特徴である大陸的気候の環境によって現実的生活が強いられ、文学との関係は、韓退之の言う文は道德を貫くうつわだ⁽²⁾という、いわゆる儒家的文学観が成立した。

この儒家的文学観は、尚書舜典に詩言^レ志、歌永^レ言とあり、毛詩大序に詩者志之所^レ在^レ、心為^レ志、発^レ言為^レ詩と見え、孔子も論語学而篇にみえる、弟子入則孝、出則弟謹而信汎愛^レ衆而親^レ仁、行而有^二餘力^一則以学^レ文の如く、文学を孔門の教養の具として重んじている孔子も、文学より道德一般を優先させている。さらに、宋の周敦頤も文は道を載せるものと説き⁽³⁾、宋の朱子は文は道の枝葉と言ひ⁽⁴⁾、清の顧炎武は、文学が天地の間に絶やしてはならない理由は、道を明らかにするからだ⁽⁴⁾と、いずれも道德・政治を第一とし、文学を第二義とすることが知られる。

歴史は異民族の侵入を迎え、漢民族が南方に移動するに至った。

小松 忠 志

ここにおいて漢民族は亜熱帯的にめぐまれた温和な気候風土に接することができた。いわゆる南朝時代は、この自然の美、そしてきれいな、しかも豊かな水、物の豊富な環境にあり、人の心も飛躍してローマン的になり、ために人情の美を歌う審美的傾向が現われて来た。このようにして男女相思の内容の詩が多く詠じられるに至った傾向は当然のことである。

このような意味で、梁時代を主として男女の心の動きを中心に編纂された「玉台新詠」に基づいて、その愛情の詩を考察しようと考えたわけである。

(注1) 作者不明の古詩に始まり、漢代から梁代に至る詩集。主として男女の心の交流による愛情の詩を編み入れた陳の徐陵の撰である。

(注2) 文者貫^レ道之器、始吾幼且少為^二文章^一以辞為^レ工、及^レ長乃知文者以明^レ道(韓退之)

(注3) 文所^二以載^レ一道也(周敦頤)

(注4) 道者文之根本、文者道之枝葉(朱子)

(注5) 文之所^二以不^レ可^レ絶^二於天地之間^一者曰明^レ道也、紀^二政事^一、察^二民之隱^一也、樂^レ道^二人之義^一也。(顧炎武)

二 分析の結果

「玉台新詠」に詠じられた詩のうち、六五八首について考察分析した結

果は次のとおりである。

一、夫婦間の詩	二五六首	約四割
二、夫婦でない男女の詩	一七七首	約三割弱
三、その他の詩	二二五首	約三割強
そのそれぞれの内訳は次の通り		
一、夫婦間の詩二五六首の内訳		
(1) 夫婦が別離していて、妻から夫への心	一八五首	
(2) 〃	夫から妻への心	三五首
(3) 夫に捨てられた妻の心	二三首	
(4) 同居している妻の心	七首	
(5) 新婚の心	六首	
二、男女の詩一七七首の内訳		
(1) 女が男を思ふ心	一〇六首	
(2) 男が女を思ふ心	四七首	
(3) 未婚の詩	二五首	
以上の夫婦間の詩と男女の詩で、各々がかわす心の動きの強い表現とやや強い表現をまとめると次のように結論づけられる。		
A、夫婦間の詩二五六首		
1. 夫婦が離別しておる場合		
(1) 妻から夫への心を述べた詩一八五首のうち	強い表現	三九首 約20%
	やや強い表現	三〇首 約16%
(2) 夫から妻への心を述べた詩三五首のうち	強い表現	一首 約30%
	やや強い表現	四首 約10%
(3) 捨てられた妻の心を述べた詩二二首のうち	強い表現	六首 27%
	やや強い表現	一首 0.5%

(4) 同居している妻の心七首のうち	強い表現	三首 43%
	やや強い表現	なし
(5) 新婚の心 六首のうち	強い表現	なし
	やや強い表現	一首 15%
B、男女がかわした詩		
(1) 女が男を思ふ詩 一〇六首のうち	強い表現	一首 約0.1%
	やや強い表現	一首 約10%
(2) 男が女を思ふ詩 四七首のうち	強い表現	二首 0.4%
	やや強い表現	七首 15%
(3) 未婚の詩 二五首のうち	強い表現	なし
	やや強い表現	なし
以上のようにまとめることができた。その結果は、夫婦間の詩が最も多く、また強い表現とやや強い表現の詩が群を抜いて多いこと、これに反して男女間の詩の中で強い表現とやや強い表現の詩が少ないことを知り得た。		
さらに、以上考察した愛情詩六五八首を、表にすると次のようにまとめられる。		

事 項	数	強い表現	やや強い表現
夫婦別離妻から夫への心 " 夫から妻への心 捨てられた妻の心 同居している妻の心 新婚 女が男を思ふ 男が女を思ふ 未婚 その他	186 35 22 7 6 105 47 25 225 658	39 11 6 3 0 1 2 0 0 62	30 4 1 0 1 11 7 0 2 56

三、強い表現とやや強い表現の詩

1 夫婦別離、妻の心の強い表現

(1)張華の情詩五首のうち其三の詩は、夫を遠方に送った空闇を守る妻の心を詠じて

「私の心は空しい姿をだきかかえるが、実は軽やかなふすが、うつろの寢床をおおている、枕をなせて独りうそぶき悲しんでいる」と

大胆なまことに艶にして強烈な女心が叙せられている⁽¹⁾。

(2)鮑令暉の雜詩六首のうち其の五の一

「明月はあかるい、その光はうす絹のしとねを照らしているそれは恋仲の夜を共にあかした時のよう、憂えたり怨んだりして夜明けを過ぎたことを想像させるようだ⁽²⁾。」と、

夫への愛情切々、ことに「相思の夜を共にするが如く、憂怨の晨を

同じくすると知る」の描写は艶にして意味深。

(3)王筠、日照駕鸞殿

「共寝した夫は遠く出かけ、結びあい愛しあつた人は久しく生き別れの生活、今となつては急に死んでしまふより外はない⁽³⁾」と、共寝した夫との楽しい過去の姿を大胆不敵な具體的な説明をしてくれた妻、今となつては急に死んでしまふより外に方法がないと悲しみの極限をうたう心が、まことにいじらしい。

(4)王叔英婦の暮寒一首

「春を迎えたが、寒さがきびしい、しかし衣はうすい、いくら寒くとも夫は腰を抱いてくれようとしな⁽⁴⁾い。」と堂々たる妻の心の強い直叙。「未だあえて腰身を懷わす。」

2。別離妻の心のやや強い詩

梁武帝の織婦

「どうかお帰りになって、この私の悲しみと病とを照らして、あなたが私を忘れないなら、私の心は長くこのままもちこたえま⁽⁵⁾しう。」と、

けなげな妻の心が、上品に表現されて奥ゆかしい。

2。別離夫からのやや強い表現

湘東王綽の晚栖鳥を詠ず

「鳥よ私の故郷から帰って来たのだらう。そしていくたびか私の妻のへやに入ったことか⁽⁶⁾。」と、

故郷を偲ぶ夫の心。

3。夫婦でない詩の強い表現

(1)女性が男性を思ふ詩

(イ)孫綽の碧玉破瓜時

「私は十六歳のとき、あなたの情熱にほだされてはじらいもせず
身をめぐらしてあなたのそばに抱かれた⁽⁷⁾」の

中国の愛情詩の中で、しかも女性が男性に対して、これほど直接的な描写で愛情を吐露してくれた強い詩は珍らしい。まことに数少ない男女間の詩としては、異色の逸品でもあらうか。

(ロ) 繁欽の定情詩

相愛の男女が情を固めるといふ定情詩。男性と会う約束をすることは女性にとってよほどのこと。ここに会うことについて約束をふみにじられた女のくやしさと悲しさとみすばらしい女心が大胆に描写された未婚の男女の詩としては、めずらしい強い表現の詩である。詩は、このように歌う。

「そこへ行つてみると、日が暮れても貴男は来てくださらない。つめたい風がわたしのえりもとを吹くのです。お互いの心の中には、まごころが通じあったはず、だからこそ密会の約束にふみきったわたし。よもや裏切りはなさらないと思っていました。それなのに持ちばうけとなつたみすばらしい道化もの。希望をなくした情ないわたし、涙を流しています⁽⁸⁾」と。

詩経以来長く伝わって来たいわゆる溫柔敦厚な中国的パターンと⁽⁹⁾文学は政治・道徳を離れて存在しないという一つの底流は、この一つの詩によつて一時的に阻止されそうな勢である。

(2) 男性が女性を思う詩、強い表現

劉孝威の雜詩三首

「独り寝のわたしは眠られない。そなたの皮膚のきめこまかいぬくもりを思い。二人横に寝た時のよろこびを思う。そして私が帰つたらこの手で眉を描いてあげるから⁽¹⁰⁾」と、

男性から女性への強い大胆な恋慕と、やさしい愛の申し入れ。しか

し、玉台新詠の全体の詩からみれば、これらはほんのわずかな数に過ぎない。

さて詩経の中にも、夫婦を大切にし、未婚の男女の交際を警戒する詩がある。

たとえば歌垣の場で美しい配偶者を見つきたいと願う男性の歌謡⁽¹¹⁾、また女子が男子に対して強引な求愛をしないようにとなだめる歌⁽¹²⁾、幸福な結婚生活を獲得するようにと教える歌⁽¹³⁾、女子の駆け落ち結婚を戒める歌謡⁽¹⁴⁾、結婚を望む女性が男性に呼びかける歌⁽¹⁵⁾、などがある。

男女の交際の詩については、強い表現の詩が少なく、また夫婦間の詩が多いということについて少しく考えてみたい。

(注1) 衿懷擁ニ虚景ヲ 輕衾モテ覆フニ空牀ヲ

(注2) 明月何ゾ皎々タル 垂幌照ラスニ羅茵ヲ 若ク共ニスルガ相思ノ夜ヲ 知ル同クスルヲ 憂怨ノ晨ヲ

(注3) 同衾遠ク遊説シ 結愛久シク生離ス 於レ今ニ方ニ溘死スルモ

(注4) 逾寒クテ衣逾薄シ 未ダ三肯ヘテ懷ハニ腰身ヲ

(注5) 願ハクハ得ン三ニタビ回ラン 光ヲ照ニ此ノ憂與一疾 君ガ情償未ダ

バシ忘レ 妾ガ心長ヘニ自ラ畢ラン

(注6) 応ニ從ニ故郷ニ返ルナル 幾タビ過ギテ入リシヤ 蘭閨ニ

(注7) 碧玉破瓜ノ時 相為ニ情顛倒ス 感ジテ君ニ不ニ羞難セ 廻ランテ身ヲ就キレ郎ニ抱カル

(注8) 中情既ニ款々タリ 然ル後烈スニ密期ヲ 謂君不トニ我ヲ欺カ 廁

ヘ此ノ醜陋ノ質ヲ 徙倚無シレ所レ之ク 自ラ傷ム失フヲレ欲ル

涙下ルコト 如シ連糸ノ

(注9) 敦厚と表現しても詩経の詩の中にも、女性が男性に対して心を投げかける、いわゆる「さそい歌」が多くみられる。たとえば、丘中

有麻、遵大路、摯兮、狡童、褰裳、子衿、宛丘などと枚挙に暇がな

い。

(注10) 独眠ハ真ニ自ラ難シ 重衾猶覺ユレ寒ヲ 愈憶フ疑脂ノ暖カナラ 彌想
フ横陳ノ歎 中略 新妝ニハ莫レ點ズルレ黛ヲ 余還リテ自ラ画カン
眉ヲ

(注11) 野有蔓草

(注12) 将仲子

(注13) 氓

(注14) 蝦蟇

(注15) 野有死麇

四 考察

(A) 男女の交際については、封建時代においては、嚴重に警戒されて
いた。以下礼記によつてその姿を考えると、

1. 男女の關係が曖昧になるのを恐れている。

(1) 故ニ男女ハ無バレ媒不レ交ヲ (坊記第三十)

(2) 男女非バザレ有ルニ行媒一不三相ニ知ラ名ヲ 非バザレ受クル幣ヲ不
交ラ不レ親シマ (リ)

(3) 故君子遠リザカレ色ニ以テ為スニ民紀ヲ (リ)

(4) 外内不レ共ニセ井ヲ不レ共ニセ二漏浴ヲ 不レ通セ二寢席ヲ 不レ通セ
乞假一不レ通セニ衣裳ヲ (内則第十二)

(5) 男女ハ不ニ雜坐セ 不レ同ジク櫛櫛ヲ 不レ同ジクニ巾櫛ヲ 不ニ親
ヲ授ケ (曲礼第一)

(6) 男女之有ルハ別 人道之大ルル者也 (喪服小記第十五)

また孔子は、君子の三戒の一つとして色情を戒めるべきと言っている。

論語季氏篇に「孔子曰ハク 君子ニ有リ二三戒」 少々時血氣未ダレ定ラ
戒ニレ之ヲ在レ色ニと。

(B) 夫婦が重んぜられる原因について、礼記には、次のような思想が見
られる。

(1) 結婚の礼は、男女の別を明らかにする。だから婚姻の礼が廃されれば
夫婦の道は苦しんで、みだらなことが多くなる。(1)

(2) 夫婦が和合することは、家がうまくいく。(2)

(3) 夫婦の間にけじめをつけることは、平和な社会が実現し、即ち天の福
が授けられたということである。(3)

(4) 男女の別が保たれてこそ、夫婦親和の道がある。(4)

(5) 男には職分があり、女にはふさわしい夫を持たせる。(5)

また「玉台新詠」にも、未婚の娘は、浮気をしてはいけないという、愛
情の突進を表現しないという警戒心をうたった詩がある。(6)

(注1) 婚姻之礼ハ所三以明ルニ男女之別ヲ也 故ニ婚姻之礼廢バズレ則ケ夫
婦之道苦シシ而淫辟之罪多矣 (解第二十六)

(注2) 夫婦和ハスル家之肥ル也 (礼運第九)

(注3) 夫婦有リレ別是レ謂フレ承クト二天之祐ヲ (礼運第九)

(注4) 男女有リテレ別而后夫婦有リレ義 (昏義第四十四)

(注5) 男ハ有リレ分 女ハ有リレ婦 (礼運第九)

(注6) 李延年 羽林郎詩一首

多謝ス金吾ノ子 私愛ハ徒ニ区々タリ

五 まとめ

以上の考察によつて知り得たことは、未婚の男女の交流がことの外嚴重
に警戒され規制されており、ために「玉台新詠」には男女間の詩において
突き破る強い心の表現が少なく、かえつて正常な男女が結ばれ、家を守る
ために必要な、そして誰にも制約されない完成した夫婦の詩が多く、また
心の強い表現が多いことを知り得た。

この封建的とも言える男女間の愛情問題は、その後、中国の流れとなつ
て近代に至った。

一九一五年の思想革命において、陳独秀氏による反封建制への運動とし

て反儒家運動が提起され、また自由恋愛、自由結婚が叫ばれたことによっても、いかに封建的な残しが存在していたかを知り得る。

さらに、何震によって「女子復権会」が組織され、近代女性解放運動が叫ばれたことはこのことを如実に物語っている。

さらに、周作人は両性間の愛について具体的な例を挙げて次のように主張している。

「われわれはこの事について二つの主張をもっている。一つは男女が平等であることで、いま一つは恋愛からの結婚である。世の著作でこの趣旨を発揮したものが、すなわち絶好の人の文学である。（尾坂徳司 中国新文学運動史 七三頁）

しかし、中国においては前述の「玉台新詠」に見られるように男女間の愛情物語は、少しく制約されるべきだという傾向が強いようである。